

教職課程の特色と魅力

副学長 毛内 嘉威

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。そして、ようこそ、教職課程へいらっしゃいました。

今、在校生の皆さんも含め、全学の1/3以上の学生が教職課程を受講しています。多くの学生が教職課程に興味を持ち、教員になるために、教職を専門的に学ぼうと受講くださっていることに感謝しています。ありがとうございます。皆さんがあつての教職課程です。今後ともよろしくお願いします。

本学は「新しい芸術領域の創造に挑戦する大学」を目指す大学であり、学部では領域横断、複合的視点、大学院では複合芸術を標榜しています。つまり、これを通じて従来にない新しい芸術領域を作り出そうというものです。今や美術は非常に幅広いものとなっています。現代における課題や社会問題をどうとらえ、芸術表現を通して如何にして解決していくのかを、模索しています。その意味で自由な発想と創造力をとても大事にしています。

繰り返しになりますが、キーワードは「領域横断」「複合的視点」・「複合芸術」で、他大学のように一部の専門性だけを学ぶカリキュラムとは大きく異なります。そして、このことは教職課程にも大きく関係しています。今、学校教育では「教科横断的な学び」「多面的・多角的な見方・考え方」が重視されており、本学の特徴的な学びを修得することは、教員にとっての強みにつながると考えます。

現在、3年生が教育実習先に赴いて授業実習等に果敢に取り組んでいます。本学の学生による教育実習での授業は、教育実習先の先生方からとてもユニークで・斬新だと評価されています。これこそ、本学の教職課程が、大学の理念である「新しい芸術領域の創造に挑戦」している証であります。

本学の教職課程は13年目になりますが、教職の魅力とは、「人づくり（人間形成）」「教育立国」の実現に深くかかわれることです。人づくりこそが個人の幸福の実現と国家・社会の発展の礎であり、日本の将来の発展の原動力となります。

教職の魅力は、子どもの人間形成に深く関わることができる面白さです。子どもの全人的な発達をサポートする職業に就き、教員も日々成長できることにあります。仕事を通して様々な子どもと関わり、その子どもの成長に尽くすことの喜びです。一人の教員が子どもの成長に関わり、教師と子どもが共に語り合いながら喜怒哀楽を共有する喜びです。これまでたくさんの学生が日本全国に教員として旅立ち、素晴らしい教育を展開しています。教職課程を担う教員も、引き続き、皆さんと一緒にこれまでにない魅力ある授業を展開できる教職課程を目指していきます。

皆さんは、美術の素晴らしさ、美術の魅力に惹かれ、美術（芸術）の持っている可能性に懸けたから本学に入學しました。本学の教職の魅力とは、中学校・高等学校はもとより社会の全ての人に美術のもつ魅力を伝えることであり、美術の可能性によって社会をよりよい方向に変えようとする力をもった生徒達を育てることです。皆さんが、大学で美術（表現）について学び、それを表現し伝えることが教職課程にそのまま生きてきます。

教職課程受講者全員で、助け合い、協力し合いながら、美術大学の学びと教職課程の学びを両立させて、日本で最もクリエイティブで挑戦する教員を目指してください。

教育実習関連科目の展望

教職課程には学内で履修する科目の他に、実際の学校に出向いて見学や体験を行い、実践的指導力を養う「教育実習関連科目」があります。

1年生の教育実習関連科目としては、前期の「教職入門」と後期の「学校体験実習1」があります。「教職入門」では、近隣の小学校と隣接する秋田公立美術大学附属高等学院での見学や体験を通して『教職の魅力とは何か?』『美術教育の意義とは何か?』という2つのテーマを追求していくことになります。後期の「学校体験実習1」では、近隣の中学校を訪問し、登校時を含めて朝の生活の様子、実際の授業や休み時間中の様子などを丁寧に観察する実習です。

2年生の教育実習関連科目としては、社会福祉施設で5日間、特別支援学校で2日間、計7日間の実習を行う「介護等体験実習」と、実際の中学生や高校生を前に美術科の授業を行う「学校体験実習2」があります。次年度の教育実習を見据え、積極的な姿勢で取り組んでほしいと願っています。



3年生では教職課程最大の山場とも言える「教育実習」がありますが、事前の確認を全体で行う「教育実習事前指導」、また教育実習後に成果と課題を整理する「教育実習事後指導」が設定されています。実習校の先生方が教育実習生に期待しているのは、上手な授業ではありません。実習を通してより多くのことを学びたいという積極的な姿勢と、生徒たちと真正面から向き合おうとする真摯な態度です。皆さんの健闘を心から願っています。そして、「教師になりたい!」という思いを強くして、実習から帰ってきてほしいと思います。

4年生では教職課程のまとめとして「教職実践演習」があります。主に喫緊の教育課題への対応等について、様々な分野の専門家や実際に教壇に立っている先輩たちにお話をうかがうなど、教育現場で役に立つ内容となっています。教職課程最後の科目に真摯に取り組み、有終の美を飾ってほしいと思います。

教員採用試験 受験機会の拡大

◇早期化・複線化で受験機会が拡大

一次試験のピークが5・6月へと早期化・分散化しているほか、秋選考等年に2度以上の募集を行う自治体も出てきています。これにより、複数の自治体にチャレンジ(併願受験)することも可能になっています。

◇3年生での受験チャンスが拡大

「前倒し受験」など大学3年生での試験を行う自治体が年々増加しています。中には、一次試験の全てを3年生で受験し、合格すれば4年生では二次試験のみとする自治体もあります。

◇試験内容の精選

一次試験から「教職教養」を廃止した茨城県では、数年ぶりに受験者が増加したとの報道がありました。このほか、各自治体では、集団面接や小論文の廃止など、試験内容の精選が進められています。

◇受験会場の増加

東北や九州では、一次試験に他県会場を設けるようになっています。受験者目線で考えると、出身でもなく、大学で教職課程を修めた自治体でもない地域で教員を志すことへのハードルが下がっています。

◇受験準備は2年生の後半から

3年生での受験を考えるとすれば、教員採用試験に臨むための準備は、遅くとも2年生の後半にはスタートしたいところです。試験内容は多種多様、自治体によって傾向性はずいぶんと異なります。筆記試験も選択式(マークシート形式)や記述式があり、美術科の専門試験の中に実技的な問題が出題される自治体もあります。受験時期から逆算して、計画的な準備を進めていく必要があります。

◇情報収集が肝心

各自治体のHPには教員採用に関する情報が満載です。試験内容はもちろん、求める教員像(人材)や教育の特色などの理解に努めることが大切です。そのほか、教員採用試験に関する書籍等を発行している出版社のHPにも有益な情報が数多く掲載されています。

進路選択の一つとして、教員採用試験に関心のある人は、遠慮なく教職支援室に相談に来てください。

教職課程を担当するスタッフ



【毛内 嘉威 教授】

青森県つがる市の出身です。現在2匹のペット（「かめきち」と「ぴの」）を飼っていて日々癒やされています。

専門は倫理、哲学、道德教育です。「人生とは何か」「人は如何にして生きるべきか」などの根本的なテーマについて考えることはとても大切なことと考えます。私自身、ずっと問い続けていますが、答えはまだ見つかっていません。

皆さんには、美術の素晴らしさ・魅力の再発見に努めつつ、教員免許状取得に向けて頑張ってもらいたいと思います。



【大関 智子 准教授】

御入学・進級おめでとうございます。桜の時期も過ぎ、そろそろ新しい環境にも慣れて来た頃でしょうか。私は毎日車で約

1時間かけて通勤していますが、特に冬から春に移ろいゆくこの時期の車窓を楽しみにしています。自然の変化だけでなく、農作業風景や祭りから四季の移ろいをより豊かに感じ取ることができるからです。秋田での生活をスタートした人も、ずっと秋田で生活している人も、まもなく秋田を離れる人も是非体感してほしい感覚です。

共に充実した素敵な1年を過ごしましょう。



【野々口浩幸 教授】

教職課程の講義では、理論だけでなく自らの実践、経験や想いを伝えるとともに、教員としてだけではなく人間として成長し生きていくために 役立つ内容にしていきたいと考えています。

教職課程は「人づくり」専攻です。人は幸せになるために生まれてきたのですが、一人では生きていけません。だから自分を大切に、人を大切に生きていくという自己肯定感を大切にしましょう。

どうぞ、本学での4年間の活動を、貴重な青春の1ページとしてほしいと思います。



【齋藤 透 特任教授】

他者に縛られず、自由に時間を使い、何にでも挑戦できて失敗してもいくらでもやり直しがきく。

一生の中でこんなふうにごせるのは、おそらく大学生の間だけではないでしょうか？（これにはあてはまらない方もいるとは思いますが…）そう考えると、大学時代をどう過ごすかは大きな問題です。

多くの人と出会い、話をし、様々な経験をして、自分らしい生き方を見つけ出してください。それは、教職の学びにとっても重要なことです。



【尾澤 勇 教授】

尾澤勇（おざわいさむ）です。美術科教育、工芸科教育、工芸演習Aを担当しています。東京都出身で中学校や高等学校の教員を経て本学に赴任し、13年目を迎えます。

本学では美術や工芸の教育に携わりながら金属工芸の作品出品を行うなど、自らも制作活動を行い、その成果を学生に還元してきました。

美大における学びは、自分が表現したいことを発見し、工夫しながら自己表現していくことが大切だと思います。何事にも前向きにチャレンジしてほしいと思います。



【嶋崎 公人 特任教授】

つい先日、私用で福島県いわき市を訪れ、昼食に「森のキッチン」というお店のパスタやサラダを食べましたが、付け合わせの地元産トマトのあまりの美味しさに衝撃を受けてしまいました。トマトなんてただの野菜と思っていた自分が情けない。

世の中にはまだまだ知らない物があるんです。価値観を揺さぶる逸品があるんです。びっくりするほどいい人いるんです。大切なことは、その存在に出会えるかどうか、その尊さに気付くことができるかどうか…ではないかと思うのです。



【加賀谷 亨 特任教授】

神社やお寺で「ああしてほしい、こうしてください」と願うのは、神仏に請求書を送りつける「請求書の祈り」で、今の状態を幸せと思って「ありがとうございます」と感謝するのが「領収書の祈り」だ、なんて話を聞いたことがあります。私たちは現状に不満があるときほど「請求書の祈り」をしたくなるものです。そして考えれば考えるほど、不平や不満が募っていきます（特に加賀谷）。だとすれば「今が一番幸福だ。ありがたい」と感謝できるほうが、心の穏やかさを保てるのかも知れません。本年度もよろしくお願いします。



【谷村 格 特任教授】

人間の脳の大きさは1万年前とほとんど変わっていません。1500ぐらい程度で特に進化も見られません。人類は太古から自然と対峙した生き方をしてきました。私たち現代人も自然の中にたずずんだり、せせらぎの音を聞いたりすると妙に落ち着きます。それは祖先が自然と共に生きていた時間が長かったからでしょう。情報過多の時代です。時には情報を遮断し自然と向き合う時間が必要に感じます。自然あふれる秋田で感性を磨いてください。



【佐藤 進 特任教授】

本学での学びを選択し専門性を磨き高めることを希望している皆さんには、大いに学び、知識と技術の修得に努めて欲しいと思います。また、卒業後の進路として教員を目指す学生の皆さんにつきましては、教員としての心構えや法律等に関する知識も必要です。現在、学校現場ではいじめや不登校等の問題もあり、その対応も多様化しています。たいへんではありますが、やりがいのある教職を目指す皆さんをしっかりとサポートしていきたいと思っています。



【有馬 寛子 助手】

有馬寛子（ありま ひろこ）と申します。岩手県出身です。秋田に来て11年になります。私は主に石を素材とした彫刻制作と美術教育の研究をしています。以前は美大附属や秋田高専で講師をするほか、アーツセンターあきたのコーディネーターや学童保育のスタッフとして、秋田の児童生徒と関わってきました。教職課程の履修は決して楽ではありませんが、きっと皆さんの将来における可能性を大きく広げてくれるはずです。一緒に頑張りましょう。



【前川原綾香 助手】

私は秋美大で4年間を過ごし、主にアニメーションやメディアアートの制作をしていました。卒業後は、本学の事務局インフォメーションの職員として5年間勤務し、この4月から美術教育センターの助手となりました。皆さんどうぞよろしくお願いします。新入生の皆さんは、大学生活が始まって1ヶ月が経ちましたが、ぜひ、新しいことにも興味の枝葉を伸ばしてほしいと思います。ちなみに私は先日初めて競輪を観戦しました。皆さんの4年間で充実したものになるよう願っています。



【佐々木柚乃葉 助手】

今年3月に本学を卒業し4月から美術教育センターのスタッフとして授業の補助などの業務に励んでいます。学生時代はものづくりデザイン専攻に所属し、ガラス作品を制作しました。素材に触れたり、仲間と話したりすることを通して、モノや人との出会いがとても大切なことなんだと感じるようになりました。皆さんはこれからたくさんの出会いを経験し、そこからたくさんのことを吸収していくことでしょう。たくさん勉強して楽しく制作しましょう。皆さんの大学生活が豊かで実りあるものになるよう応援します。